

患者様考

国立病院機構東埼玉病院
院長
川井 充

「医療」の投稿論文の査読をしていて気になることがある。ときどき「患者様」ということばが出てくるのである。学術論文であるから、特別な意味を持たせるのでなければ「患者」でよいはずであるが、おそらくふだんから何の違和感もなく使っているのだろう。10年以上前はほとんどなかったことだと思う。

「患者さん」を「患者様」というようになって久しい。当初は患者の権利の尊重、患者サービスの向上の目的から意識して使われていたと思うが、違和感を持った医療従事者も大勢いたはずである。しかし、最近は全く無意識に使われるようで、私はむしろそちらの方に違和感を覚える。尊敬語や丁寧語は使っていると、尊敬や丁寧の意味合いはどんどんすり減っていくのは、「お前」や「貴様」など枚挙にいとまがない。「お御足」や「お御籤」を馬鹿丁寧という人はいないし、最近は社会的に地位の高い人まで「おっしゃられる」などという二重敬語を平気で使う。「そこの患者様、ちゃんと待ってなきゃだめじゃない！」などという使い方がされるのも間近かもしれない。

日本病院会雑誌の2012年第10号に、「病院の理念に表れる言葉の影響 患者さまか、患者さんか、それとも患者か」という論文があり、興味深く読んだ。病院のかかげる理念と基本方針の中の「患者」にどのような呼称をあてているかを調査したところ、社会医療法人病院の55.9%、自治体等公立病院の36.8%、大学病院の13.7%が「患者様(さま)」を採用し、「患者」のみの呼称はそれぞれ1.9%、12.8%、35.0%であったが、患者満足度調査では90%が「患者様(さま)」を採用していたという。「患者様」が使われる頻度は設置主体によって差があることに加えて、患者に直接語りかける場合に「患者様」が多

く使われているようである。

ところで、「病人」と「患者」はどこが違うか直ちに正確に答えられる人は多くないと思う。「病む人」と「患う者」の間に字義上の明確な差を見いだしにくいからだ。しかし辞書を見れば明らかなように、病人は病気にかかっている人であるが、患者は病気のために医者の治療を受ける人であって、後者は医者側の使うことばなのである。

英語では病人は sick person、患者は patient であり、後者はある本では sick person under the care of a doctor と説明されているから、患者という熟語が内容をよく表現しているかどうかは別として、患者 = patient である。形容詞の patient には(黙って)我慢するとか忍耐強いという意味があり、私はこれまで何となく「患者は病気やけがによる痛みや不自由さにじっと耐えているから」と思っていた。しかし、英語の辞書をよく読むと、patient には上記のほかに the recipient of any of various personal services という説明もあり、さらに治療を受けることに伴う痛みや不都合にじっと耐えているからではないかと思うようになった。よく考えれば当然だが、医療の場で痛みや不自由にじっと耐えていたのでは何もはじまらない。患者は医師に訴えることによって医療がはじまるのだ。ちなみにドイツ語では病人も患者も Kranke であって区別がないのが興味深い。

病気やけがによる不都合から少しでも逃れるために、つらくても我慢強く医療を受けるのも英語の patient の本質なら、Mr Patient や Mrs Patient ははなはだ滑稽だ。日本(語)の患者は我慢とは無関係かもしれないが、患者様と呼ばれることで患者自身が医療を受けることの不都合を納得するのか、医療に対して満足するのかは疑問である。さらに問題なのは、いつも使っている医療の側はすっかり「患者様」になれているが、いきなり病院に来た患者はなれていない。医療との間に心理的距離を感じたり、からかわれたと感じたりする人は私たちが想像するよりはるかに多いのではないか。

いろいろ考えたものの、当然結論は出ない。無意識のうちに平気で「患者様」といつている自分に気づくと、なんともいえぬみじめさを感じるこの頃である。